

## 「作品」としての社会理論—北田暁大氏へのリプライ

高橋 徹

その理論的素養はもちろんのこと、早くから歴史社会学的な作品を世に問うておられる北田暁大氏は、本書の評者としても願ってもない配役であり、氏の目に本書がどのように映るのか恐ろしくも、また楽しみでもあった。それに、これはまったく個人的なことであるが、北田氏と私とはまったくの同年代であり、まさにこの同世代の研究者に本書の取り組みがどのように評されるか、興味深く氏の書評を読ませていただいた。

さて、私に許された字数も限られているので、さっそく氏のコメントにそって可能な範囲で私自身の考えたことを書いてみたい。

まず、【1】の部分では、「ルーマンは歴史《も》語った」のではなく、「ルーマンは歴史《を（こそ）》語っていた」との言葉に象徴されるように、本書が企図したものを的確に捉え、かつ積極的に提示していただいた。

そして、【2】で北田氏は、次々と重要な指摘をおこなっている。例えば、氏はルーマンの歴史解釈の手腕に触れ、次のように述べている。ルーマンによるゼマンティック論は、「ルーマンのゼマンティック概念やコード／プログラム概念を身につけていさえすれば、自動的に導出されるようなものではない。とてつもなく意外な『区別』を歴史のなかに見だし、理論整合的な形で言語化する—その絶妙さはまさしく『職人業』といえる。」この指摘には、私も同感である。実際、『社会構造とゼマンティック』を読んでみると、主と

して16世紀以降のヨーロッパ各国の文献が縦横に参照されており、そこから「職人」的な手口でゼマンティックの変動が描かれている。こうして描かれる「階層的分化から機能的分化への移行」という経緯にしても、その記述の複雑性にふれてみると、とても単純に歴史の変動の「モデル」とか、「図式」などといえるものではなく、むしろ、如何にこの歴史的移行が *unwahrscheinlich* なものであるかを実感させてくれる、そんな記述になっている。

そしてこの歴史的移行は、例えば、本書で意味の三つの次元の分化を例に示したように、ルーマンの使用する概念がそこから生まれ出てきた当のものでもある。確かに、北田氏の指摘するように、近年、歴史に関心を持つ若手研究者は増えているように思う。もしそれが、単なる研究手法上の「流行」以上のものであるとすれば、現在の事象をただ記述しただけでは何か底が抜けてしまっているような不全感をともなうからではないかと思う。少なくとも私は、例えば、ルーマンを新奇な生物学の概念まで援用した現代風の「社会システム／コミュニケーションの一般理論が描かれたカノン」として読んでいるだけでは、何かこうはぐらかされたようなものが残る。したがって、本書の作業は、私自身が、ルーマンを読みつつその底を打つ試みだったともいえる。

北田氏は、【2】の末尾で、どの範囲を有意味な変動として抽出するかという「スパン問題」を取り上げている。これについては、

さしあたりシステム準拠がガイドラインとなりうる、と答えることができる。システム準拠抜きに、それ自体として有意味な変動のスパンというのを考えるのは困難である。相互作用システムであれば、そのシステムだけに重要なエピソードというのがあるであろうし、同様に政治や学問の世界においてもその世界において画期をなすエピソードがあるだろう。ルーマンが、数百年のスパンでゼマンティック変動を分析したのは、全体社会に準拠して分析したからである。

第一のガイドラインが、システム準拠だとすれば、さらに観察の視点を分節化するうえで重要な第二のガイドラインが、「変異」「選択」「再安定化」の諸水準である。例えば、観察対象となっている「言説」は、既存の言説に対して「否」を唱えたものなのか（変異）、既存の言説に代わって新たな首肯性を獲得したものなのか（選択）、その言説を核として新たなシステムが形成され、そのシステムの内部でその言説の首肯性が再生産され続けるに至ったか（再安定化）といった局面をそれぞれ区別することができる。その際、どのシステムに準拠してその観察をおこなっているのかも明確でなければならない。ルーマンは、この三者を社会—文化的進化のメカニズムと呼ぶが、この三者が十分に分化して機能しているのはさしあたり全体社会だけだとみなしている。このあたりについては、現在、もっともまとまった議論が展開されている *Die Gesellschaft der Gesellschaft* を訳者の一人として訳出中なので、追って材料を提供できると思う。

最後に北田氏は、歴史社会学の現状を、様々な「方法装置」に溢れ、「方法なき実証史学の危機が皮肉にも歴史社会学の繁栄を支えている」と診断している。そのような状況で、歴史分析のツールとして応用困難なルーマン理論の価値は何処にあるのかと問いかけている。その問いかけは、実証性を追求した

「記述」とツールのアクチュアルな切れ味を身上とする「分析」との間で引き裂かれているともいえる歴史研究に対する問題意識に基づいたものである。だから、ここでルーマンの理論はこんな「記述」や「分析」に使える云々といった回答をしようとは思わないが、この点は具体的な事例研究の試行をとおして積極的に検討されるべき事柄であるし、私自身も現在その途上にある。

さしあたり、ここで注目したいのは、ルーマン理論が、全体社会を記述する「社会理論 *Gesellschaftstheorie*」だという点である。北田氏が指摘するように、ルーマンの進化論・変動論が、「歴史的分析の一般的枠組み（変化の理念型）を示すものというよりは、むしろ歴史記述という行為が持つ本質的な複雑さ、困難さを浮上させ、記述者の立ち位置 *position* をあぶり出す『索出的』な契機」であり、とりわけそうした性格が鮮明に際立つのは、ルーマンの理論が全体社会の理論であるということと無関係ではない。ルーマンは、おおよそ17世紀から現在に至る400年程度のスパンで近代社会を捉えており、その大半がごく単純な意味で「歴史的」事象となるのは当然だが、すべてが歴史研究の範疇に入るものでもない。対象を記述するのは現代にいるわれわれであり、したがって、過去の来歴とともにそれを記述するわれわれの立ち位置をもまた、社会理論は包含する。

こうした一種の自己言及性は、ルーマン理論自体の理論構成であるとともに、私が本書でルーマンに適用した読みの視点でもあった。つまり、彼の理論が、彼自身描くところの歴史的移行に根ざした歴史的所産であることを明らかにすること。それは、ルーマンの著作をひとつの「作品」として読むということにはほかならない。社会理論が作品性を帯びるのは、それが無謀にも記述する巨大で、やむことなく変化する対象に社会理論自体が内包されていることに由来する。それゆえ、北

田氏が指摘する記述の困難さに関わる「倫理」は、自覚すべき倫理であるだけではなく、本来、記述する者なら誰もが否応なく投げおかれている条件でもある。ルーマン理論の歴史に対する自己言及的な関係は、確かにそれを単純な分析のツールとして「応用」することを難しくしている。しかしそれは、それでもなお、人がみずからの Passion にしたがって記述を試みることを妨げるものではない。ほかでもないルーマンの試みもまた、

ひとつの“*Theorie als Passion*”であったのだから。

#### 文献

- Baecker, D./J. Markowitz/R. Stichweh u.a.(Hg.), 1987, *Theorie als Passion. Niklas Luhmann zum 60. Geburtstag*, Frankfurt a.M.
- Luhmann, N., 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Frankfurt a.M.